

【研究ノート】

「私的言語論」の再解釈に向けて
——数学の哲学の「最終草稿」における「規則遵守論」との関連を中心に

Toward A Reinterpretation of “the Private Language Argument” : A Connection with “the Rule-following Considerations” in “Last Writings” on the Philosophy of Mathematics

入江 俊夫
IRIE Toshio

要旨 This paper concerns so called “the Private Language Argument” in *Philosophical Investigations*. Many interpreters have treated this argument as a kind of *reductio ad absurdum*. In my opinion, however, this interpretation is extremely wrong. Wittgenstein doesn’t intend to give any kind of demonstration but makes all his possible efforts to free us from illusions of language which imprison our way of seeing things. I will reveal this point by focusing on his transition from philosophy of mathematics to philosophy of mind, especially on “the Rule-following Considerations” in the manuscript written in March 18, 1944.

1. 数学からころへ¹⁾

現行の『哲学探究』²⁾(以下、『探究』)が、どの手稿・タイプ草稿のどの箇所に基づくのかを追跡したMaury³⁾の研究によれば、『探究』第197節から第198節の間に実に6年余りに及ぶ隔絶が存在する。この事実、この辺りからいわゆる「規則遵守論」がにわかに佳境に入っていくこと、『探究』の「戦前版」から「中間版」への構想変更と関わっていることを考えれば、いっそう意義深いものをして映る。

当初『探究』は、始めから第188節までの言語哲学的考察の後、後半として数学の哲学が置かれることが予定されていた。(戦前版構想)この後半部となるべき数学の哲学についての草稿は1937-8年に作成され(TS222⁴⁾(現行『探究』の第189節から197節までの諸節はすべてこの草稿に含まれている)、また、Diamondが編集した1939年の数学の基礎についての講義終了後しばらくして書き始められた手稿(MS122)以来、「原稿帳」と呼び慣わされている基本的な手稿の大半が数学の基礎の話題で占められるようになる。1944年の春の時点でも、ウィトゲンシュタインは、伝記的項目を作成していたJ.Wisdomに「ウィトゲンシュタインの主要な貢献は数学の哲学におけるものであった」と付け加えるように指示するほど数学の哲学の研究に没頭していた。ところが、同年夏には構想が変更され、規則遵守論から私的言語論へと続いていく中間版へと舵が切られる。そして、その際に前述の第198節が成立したと推測される。(実はこの所見にはいくつかのソースがあり、「原稿帳」MS124のものは1944年7月3日という日付が付されている。)その直前の同年春に記された数学の基礎についての手稿では、後になればなるほど、規則に従うことについての考察が頻出するようになり、その際「『私的言語』の可能性」(MS124, p. 189)という句が出現する他、私的言語論で述べられている所見とほぼ同じ所見さえ見受けられることを

考えれば、規則遵守論の成熟とともに（それまでも考察が重ねられていた）私的対象に関する考察との連関が見出され、構想の変更が起こったと見るのが自然であろう。また、両者の連関はクリプキ解釈が力説したところでもあった。

この年の春から夏にかけてウィトゲンシュタインにどのような考えが去来し構想変更に至ったのかは解釈上興味深い問題であるが措き、本稿では、以上のような背景から、数学の哲学の最後の方の草稿を参照することで、「私的言語論」（第243-315節）に新たな光を投ずることはできないか、ということを試みる。従来、「私的言語論」は私的言語の不可能性を論証する帰謬法として読まれてきたが、本稿では、囚われた見方からの解放という側面を強調する捉え直しの可能性を追究してみたい。題材としては、主として第258節の有名な感覚日記についての所見とその周辺を取り上げる（第2節）。本稿が捉え直しのための「補助線」として用いるのは、1944年春に記された規則遵守論（MS124）である。まず提示しその性格を明らかにした（第3節）後、感覚日記に立ち返る（第4節）。その過程で、特に本稿では、実践（Praxis）概念の重要な含蓄を明らかにすることで、捉え直しのための新しい光を投ずることはできないか試みることになる。最後に結論に加え、「私的言語論」後半（第281以降から）の捉え直しの方向に言及する（第5節）。以上を通じて、私的言語論再解釈の方向性を提示し、かつその方向性が見込みのあるものであることを示したい。

2. 言葉はどのように感覚を表すのか？—感覚日記—

『探究』第258節の感覚日記の「思考実験」は、第256節から始まる、どのようにして感覚は言葉によって表されるのかというテーマに対する私的言語論者の解答—感覚語が叫びや振舞いなどの自然な表出を介さずに、直接に感覚と結びつく—を吟味するべく、それを先鋭化するために取り上げられている。

まず概略を述べよう。「私」は、ある種の感覚が繰り返し起こることについて日記を付けたと思っている。そのため、その感覚を「E」なる語に結びつけ、自分がその感覚を持った日には必ずカレンダーに書き込む。「E」の定義は、「E」が起こったときに自分の注意をその感覚に集中しつつ、「E」と言ったり書いたりするといった一種の直示的定義によってなされるとされる。注意力の集中によって、記号と感覚の結合を自分に刻み込むわけである。

—もっとも「自分に刻みつける」というのは、このような出来事を通して、私が将来正しくその結合を思い出すようになる、ということではかない。しかしこの場合、私にはその正しさについての規準などないのである。そこで、ひとは、私にとっていつも正しいと思われることが正しいのだ、と言うかもしれない。そして、このことは、ここでは、<正しい>と言うことについて語るができない、ということではかないのである。（PI-I, 258）

以上に対する典型的な批判は、私は、ある一定の感覚を「E」と呼び、それを記憶に留め、将来それと似た感覚をその記憶に照らして判断することは可能なのではあるまいか、とか、同じ感覚と呼ぶ規準を（他人に対してと同様）自分にとってだけ定めることもできるので

はあるまいか、というものである。したがって、もしこれを帰謬法による論証と見なすのであれば、補強のために、なぜ私的言語論者が手に入る資源だけでは将来の正しい適用について語る事が不可能なのかを説明する論拠を提示しなければならない。

しかしながら、いまのこの構図においてどんなに奮闘したところで、決定的な論拠が提出できるわけがない。というのも、この構図はわざとウィトゲンシュタインが私的言語論者の偏った見方をカリカチュアライズして作った単純化された構図なのである。むしろ、我々が力を入れなければならないのは、この構図から徹底的に欠落してしまったものは何であるかを見てとることである。だが、それを達成するにはどうすればよいだろうか。本稿で提案したいのは次である。上記引用箇所最後は、規則遵守論の第202節、「それゆえ、規則に従うことは実践である。そして、規則に従っていると信じていることは、規則に従っていることではない。だから、ひとは規則に<私的に>従うことはできない」との関係において理解すべきである。クリプキが指摘したように、「私的言語論」の背景には規則遵守論がある。しかしながら、我々はクリプキとは全く違った側面を浮彫りせねばならない。ここには、ウィトゲンシュタインの哲学に特有の困難があるのである。すなわち、ここで重要なのは、欠落してしまったものが何であるかを指摘することに加えて、それを正しい光のもとで見ることなのだ。この点は規則遵守論でも共通しており、容易に素通りされてしまうものでありながら、彼の哲学の核心に属するものであるため、本稿でも扱わずには済まされない。次節では、こうした問題性を踏まえつつ、規則遵守論を解釈するための「補助線」として、1944年春に記された所見を解釈することにより、「実践」概念の持つ重要な含蓄を明らかにする。それこそが上の構図から欠落していたものなのである。

3. 規則遵守論1944年3月18日

以下の所見は1944年3月18日という日付が振られており、『数学の基礎』⁵⁾(以下、『基礎』)で繰り返し行われた規則遵守に関する考察の最後の方に位置する。『基礎』の第7部第47節に相当するが、下記の最後の2段落は編集により第1部に移されている。規則遵守論の理解に対して決定的な重要性を持つにもかかわらず、第3版で増補された部分なのでまだ邦訳がない⁶⁾。紙面をとるにもかかわらず、もともとの文脈ですべて引用したい。

規則が君を強制しないのなら、君は規則に従ってはいない。

だが、それでは、私の好きなように従うことができるのであれば、いかにして私は規則に従ったらよいのだろうか。

私の行うすべてがある遵守であるときに、いかにして私は矢印に従ったらよいのか。

だが、すべてが遵守であると解釈されうるということは、すべてが遵守であるということではない。

だがそれでは、いかにして教師は生徒に規則を解釈してやることができるのか？(というのも、教師は確かに生徒に一定の解釈を与えなければならないのだから) —やはり、言葉と訓練によってでないとするれば、他にどうしようがある？

そして、それらに対して生徒がしかじかに反応するとき、彼は(そのように解釈された)規則を体得した(hat … inne)のである。

しかし、重要なのはこのこと、すなわち、我々に理解を請け合ってくれるこの反応

は、特定の状況（Umstände）と、特定の生活形式と言語形式とを、環境（Umgebung）として前提しているのである。（顔がなければ表情もないように）

（これは重要な思考の動き（Gedankenbewegung）である。）

すなわち、彼は、分別のある人間のように答えるのだが、我々と共にゲームをしてはいないということがありうる。

そして、思考や推論は（計算と同様）、勝手な定義によって限定されているのでは勿論なく、我々の生活における思考や推論の役割と呼べるものの組織体に対応した自然な限界によって限定されている。（MS124, pp. 149-151）

「これは重要な思考の動きである」（以下、「やはり、言葉と訓練によってでないとするれば、他にどうしようがあらう？」からこのコメントまでの部分を「所見3.18」と呼ぶ）と記されているように、この所見において、何かしら重大な「哲学上の発見」が起こったに違いない、と私は見る。また、後の展開を方向付ける観念—反応（Reaktion）と環境（Umgebung）—が一緒に出現している。ここで我々は、実践概念の含蓄、言い換えれば、「私的言語論」はもちろん、「アスペクト論」などの性格にとっても重要な光を投げ掛ける思考の転回点を目の当たりにしているのではなかろうか。また、「自然な限界」は任意性を制限しており、後期哲学における有意味性の限界を考える上で示唆的であるように思われる。様々な意味で重要な所見であるが、本稿以下では、「私的言語論」の解釈という限定された目的のためにこの所見のポテンシャルを引き出してみよう。

以下、「反応」と「環境」に分けて考察する。これらの概念を、「…解釈ではなく、そのつどの適用場面で、我々が『規則に従う』とか『規則に反する』と呼んでいることにおいて表れる規則の把握の仕方が存在する…」（PI-I, 201）こと、それ故、「規則に従うことは実践である」（PI-I, 202）ことの認識へ通じていくものとして、我々は読み解くことになるだろう。

だが、これらの概念の解明の前に、ウィトゲンシュタインの哲学的営みの性格を見ておく必要がある。これらの概念の性格は、彼の哲学的営みの性格と不可分であるので、彼の哲学が逸されてしまえば、解明そのものが誤った方向に向けられてしまうからである。

3.1 ウィトゲンシュタインの哲学の性格

上記引用所見中の「やはり、言葉と訓練によってでないとするれば、他にどうしようがあらう？」という言いまわしが助けになる。お馴染みの「0」から始まる偶数列を書き付けるという言語ゲームで考えてみよう。言葉と訓練、反応や環境を提示することによって、ウィトゲンシュタインは何をしているのだろうか？彼がやっていることは、「1000」の次に「1002」ではなく、「1004」と書いてしまう生徒に対して、（あるいは、そのような生徒を念頭に置いたとき自分自身に対して）「1002」が正しいことを正当化するために持ち出す根拠を提示することであろうか？言い換えれば、クリプキ解釈で有名なクワスの生徒に対して、「正面からの解決」を示すことなのだろうか？ここでウィトゲンシュタインは、「反応」と「環境」という用語を用いて、彼の理論を提示しているのだろうか？

答えは無論「否」である。「言葉と訓練、反応や環境」は、「1002」が正しいことを正当化してくれはしない。それどころか、「すべてはどうかすれば正当化することができる、

というのは本当である」(BGM VI-39)とウィトゲンシュタインはパラドックスを積極的に容認している。では、我々は、規則遵守に関する懐疑論者に屈して、何かを意味するという事実などどこにもない、というべきなのだろうか？

そうではない。我々が探していたものなどどこにもない、という以前に吟味する問題がある。我々は自分自身が何を探しているかについて明晰なのだろうか？我々は自分自身が問題にしているものはどんなものなのかをわかっているのだろうか？ここでウィトゲンシュタインは、自らの思考の不透明性と格闘しているのである。

「いかにして人は規則に従うことができるのか？」これが私の訊きたいことである。

だが、ある規則に従うことにはいかなる困難も見出していないにもかかわらず私がそのように問いたくなる、などということはいかにして起こるのか？

明らかに我々はここで、自分の目の前にある事実を誤解しているのだ。(BGM VI-38)

およそ記号は可能なあらゆる仕方で解釈することができる。それにもかかわらず、いかにして人は規則に従うことができるのだろうか？これが、ウィトゲンシュタインが繰り返し問うた問いである。この問いにはどこか誤解がある。共同体説であれ、傾向性説であれ、問いが容認された上で、答えが提示されていると解釈されてしまえば、ウィトゲンシュタインの哲学が行われている場所を、すでに通り過ぎてしまっている。問題は、問いである。

この問いに対して、所見3.18は、「言葉と訓練によってでないとするれば、他にどうしようがあるか？」と、最も普通の(常識的な)答えを提示し、「生徒がしかじかに反応するとき彼は(そのように解釈された)規則を受け入れた」と述べる。この「普通の答え」は一見全くインフォーマティヴに見えないのが特徴的である。この点が、理論の提示のような目立って答えであるようなものの提示とを分かつ徴候になっている。それは、当初の問いの答えとして全く十分でないように見える。その答えは我々の要求を何ら満たしてはいないように思えるのだ。我々は、何でそんな取るに足りないものが答えなのか、と言いたくなる。我々自身が期待しているものへと囚われた視線(我々は自身の見たいようにしか見ない)から見れば、それは我々の問いとは全く関わりのないぼろや塵のように見える。

もし私が、ネズミがぼろや塵の中から自然発生してくるのだ、と仮定したがっているのであれば、そうしたぼろを綿密に調べ、ネズミがどのようにしてその中へ隠れることができたのかとか、どうしてそこへ入り込めたのかなどを探求してみるとよい。しかし、もし私が、ネズミはそうしたものから発生するはずがない、と確信しているのであれば、そうした探求はおそらく余計なものとなるだろう。

しかるに、哲学の中で事の詳細をこのように観察してみることに反対しているもの、これを我々はまず理解することを学ばなくてはならない。(PI-I, 52)

懐疑論者の議論は、私は自分の従い方を正当化することはできないということから、意味などというものは存在しない、という結論へと進む。そこにおいて通底しているのは、事

柄をある特定の仕方で見るとよくなるように囚われたまなざしである。このまなざしが問いに問いとしての力を与えている。だから、最終的な「答え」は往々にして、当初は取るに足りないぼろ切れに見えるのである。だが、もちろん、ぼろ切れはそのままでは困惑を鎮められはしない。まなざしを向け変えること、我々の見方が変えられることによって、我々の期待が誤解に基づいていたことが明らかにされる必要があるのである（理論の提示ではなく）。そして、まなざしが向け変えられたとき、当初はぼろ切れに過ぎなかったものが、もっとも強力なものとなるのである。

我々にとって最も重要な事物のアスペクトは、その単純さと平凡さによって隠されている。（人はこのことに気づかない、—それがいつも目の前にあるからである。）…。我々は、ひとたび見れば最も驚くべき、最も強力なものに注意を払うことがないのである。（PI-I, 129）

今の場合、我々の求めていた（期待していた）のは、無数のクワスの可能性から正しい解釈を切り離す根拠である。我々は、そのようなものがあるに違いない、と思っている。「所見3.18」では、まず、我々は彼に言葉と訓練を与え、彼は一定の仕方でも反応することが言われる。この答えは、「その平凡さと単純さ」により、当初我々が求めていた答えであると認定するどころか、まさか関係するとさえ思われない。だが、実際に一度でもまなざしが向け変えられ、この先入見から自由になって、それまでありふれた取るに足りないものと思っていたもの、すなわち、「我々は彼に言葉と訓練を与え、彼は一定の仕方でも反応する」を見てみると、それは全く違った相貌を帯びている。所見3.18の以下の一節はこの相貌（その相貌こそ、本稿で取り上げたい実践概念の含蓄である）に関する記述である。

しかし、重要なのはこのこと、すなわち、我々に理解を請け合ってくれるこの反応は、特定の状況と、特定の生活形式と言語形式とを、環境として前提しているのである。（顔がなければ表情もないように）

したがって、以下では、この「相貌」を読み取るべく、「環境」を中心に解釈する。まず、「反応」について考察し（3.2）、その後で、いましがた見たウィトゲンシュタインの哲学的営みに沿う仕方でも「環境」を解釈したい（3.3）。両者とも全面的な究明とはいえないが、「環境」が規則に従うことの「隠された」相貌についてどんなことを明らかにしているのかという問題を追究することを通じて、実践概念の重要な含蓄が明るみにもたらされるであろう。⁷⁾

3.2 「反応」(Reaktion)

まず、所見3.18から再掲する。

それらに対して生徒がしかじかに反応するとき、彼は（そのように解釈された）規則を受け入れたのである。

重要なのは、「しかじかに反応するとき」である。とはいっても、これでもまだ無性格に見える。だが、以下の所見と[・]考え合わせると、(実践概念へと結実する) ウィトゲンシュタインの「自然主義」の深まりを感得させてくれるであろう。

言語ゲームの起源と原初的形式は反応である。この形式の上にはじめて、より複雑化された形式は発展しうる。

私は言いたい、言語は洗練である。「始めに行為ありき」⁸⁾

これは、1937年に書かれた草稿にある所見である。

この「反応」は、どのような仕方で問題の解明に資するのだろうか？所見3.18が記される数日間、ウィトゲンシュタインは連日大量に書き込んでいる。その3日前の所見も、「規則は固い手すりを持った道のように君を導く」(BGMVII-39, MS124 pp. 130-1)とした後で、やはり、「しかし、人は、規則はあらゆる可能な仕方で解釈することができる」と反論することができる」と(自分に)やり返すのだが、その後で、「ここで規則は命令のように働く」と記している。次いで彼は、「何か違ったものを持ってこい、同じものを持ってこい」(BGM VII-40, MS124 pp. 131-2)という言語ゲームについて考察する。そこでは「同じ」の定義はまだ与えられていない。私見では、この場合、自然と同じと認めたものが「同じ」であろう。もちろん、我々はそれをある程度まで、言葉によって限定することができる。だが、それはあくまでも、ある程度まで、である。(それが規則のパラドックスが教えるところである)自然な反応をなしで済ますことはできないし、その必要もない。そして、その後で、ウィトゲンシュタインは、

語を正当化なしに用いることは、不当に用いることではない。(ibid.)

と記している。このことは、規則の把握と「自然な反応」が密接に結びついていることを示している。この一節は、ほぼ同じ文面で、本稿の主題である『探究』の私的言語論の真つ只中 (PI-I, 289) にも出現する重要な所見である。

3.3 「環境」(Umgebung)

“Umgebung”(「環境、周囲」)は、以前から用いられていたものの、規則遵守の考察が成熟してくる過程で効果的に用いられるようになる用語である。説明のために少々早い時期の一見奇妙な問題提起を取り上げよう。

数学がゲームなら、ゲームをやることは数学をやることだ。すると、なぜダンスをやることも数学をやることにならないのか？(BGM V-4)

ダンスの複雑なステップは、しかるべき翻訳規則によって2次方程式を解く過程に変換できるかもしれない。その場合、ダンスをやることも数学をやることになってしまわないのだろうか？もちろん、ダンスをやることは数学をやることではない。では「なぜダンスをやることも数学をやることにならないのか？」少なくとも、それは規則によっては決まら

ない。規則の適用（の見かけ）に訴えただけでは、この点は判明にならないのである。むしろ、規則の適用の見かけにおいて、実際にどんな規則に従われているのかを、何か他のものに訴えて、明らかにしなければならないのだ。すなわち、そこでどんな規則に従っているかを、そこで何が行われているかを特定することを通して、同定しなくてはならないのである。これは、取りも直さず、「我々に理解を請け合ってくれるこの反応」（=2、4、6、…）の素性を明らかにすることである。そして、上の引用箇所で言われているのは、この「反応」が前提している「環境」、すなわち、「我々に理解を請け合ってくれるこの反応は、特定の状況と、特定の生活形式と言語形式」との関係でそれが明らかになる、ということであると考えられる。

では、この「特定の状況と、特定の生活形式と言語形式」とはどんなものだろうか？少し後の手稿でウィトゲンシュタインは、戴冠式の壮麗さを提示して次のように付け加える。王様を取り囲む人々が侮蔑のまなざしや嘲笑で満ち満ちていたらどうだろうか？この派手な衣装はその壮麗さを失い、一種の見せしめという意味を帯びるだろう。

今の例は「環境」という用語も出現しており、「環境」が問題になっていることは明白であるが、私見では次のおおよそ同時期に記されたと目される次の例こそ、「環境」という用語こそ出現していないものの、その強力さに関する非常に啓発的な事例であると考えられる。

2匹のチンパンジーのうちの1匹が、| - - |という記号を粘土質の土壤に書き付けたところ、もう1匹がそれを受けて、| - - || - - |…と刻み付ける、という状況を想定しよう。これは規則に従うということだろうか？ウィトゲンシュタインの答えは「否」である。だが、彼はそれに続けて、「例えば、一種の教育といった現象が、実演披露と模倣、試行錯誤、アメとむち等といった現象が」観察され、最終的にもう一方のチンパンジーが、それまで扱ったことのない事例も正しく並べて行けるとしたら、規則に従っているといえる、とする。問題はその後発問である。

しかし、第一回目にしてすでに一方のチンパンジーが、この過程を繰り返すことを企てて（vorgenommen）いたら、どうだろうか？行為したり話したり考えたりする特定の技術のうちにおいてのみ、人は何かを企てることができる。（この「できる」は文法上のそれである）（BGMVI-43）

「第一回目にしてすでに一方のチンパンジーが、この過程を繰り返すことを企てていたら、どうだろうか？」「そんなことはあり得ない！」と我々は思わず反応する。そのように応じたとき、我々は「企てる」という概念にとって、相当複雑な環境が前提されることを見渡している。ここには、何かを企てることには特定の技術（規則遵守）が必要とされることなどを見てとらせることを通して、「企てる」という概念に反映されている生の営みの複雑さ、どれだけ多くのものが前提されているかということがくっきりと示されている。

ある複雑な環境にあって、「規則遵守」と呼ばれているものが、それだけ孤立して見出されたとしても、我々がそれを「規則遵守」と呼ばないであろうことは確実である。

（BGM VI-33）

そして、この「概念に反映されている生の営みの複雑さ」こそ、3.1で『探究』第129節を引いて指摘した「我々にとって最も重要なアспект」の一つであり、囚われたまなざしが、気付くことのできなかつたもの、本稿で明らかにしたかつた実践概念の重要な含蓄にほかならない。

4. 感覚日記に欠落していたものとは？

それでは、第258節の感覚日記に戻ろう。感覚の私的な直示のみによって「E」は定義されないことを得心するために本稿で提案する考察の方向性はいまや明らかである。この「E」には、「概念に反映されている生の営みの複雑さ」が完全に欠落していることを見てとる、というものである。この方向性に見込みがあることは、第258節の注釈となっている第262節を見れば得心されよう。

人は言うかもしれない、私的な語の説明を自分自身に対してする人は、内面で語をしかじかに使用することを企てなければならないのだ、と。彼はいかにしてそれを企てるのであろうか？彼がその語の適用の技術を発明するとか、それを出来上がったものとしてすでに見出していると想定すべきなのだろうか？ (PI-I, 262)

前節のチンパンジーの事例と同様、「企てる」(vornehmen) が用いられていることにも注意されたい。「E」には適用の技術も与えられていなければ、その前提となる「環境」も欠落しているのである。

このような方向で考察していくことを通じて、感覚日記の構図がいかに人工的な、リアリティを欠いたものであることが浮き彫りにされてくるのである。

5. 結語と前途瞥見

本稿では、「私的言語論」における「感覚日記」の一節とその周辺を取り上げ、『基礎』の「規則遵守論」との関連を明らかにすることによって、一種の帰謬法としてではなく、見方の転換を促すものとして解釈する可能性を追究した。その過程で、ウィトゲンシュタインの哲学のもつ、囚われた見方からの解放という側面を指摘する一方で、「我々にとって最も重要な事物のアспект」を見さしめるという側面を、実践概念のもつ重要な含蓄を明らかにすることによって強調した。最後に後者の側面がさらに積極的に展開されていくということについて展望を述べたい。

『探究』第281節から議論はさらに深まり、それまでの「私的言語批判」を行動主義と区別し、「批判」の性格を明らかにすることに主眼が移る。その過程で、本稿で摘出した実践概念の含蓄が立ち入って探求される。そこでは、箱の中のカブトムシ (PI-I, 293) よりしく、「外側には物、内側にはこころ」というような二元論的な構図による単純化が繰り返し斥けられ、「こころ」概念を支える、我々の複雑な実践の有り様がいよいよ詳細に目に入るようになってくる。

痛みを感じているのは身体なのか、というのは、どのような種類の論争問題なのか？
—どうしたらそれに決着がつけられるのか？どうしたら、痛みを感じているのは身体

でない、ということが承認されるのか。一たぶん、こういうことであろう。誰かが手に痛みを感じているとき、そのように言うのは手ではなく（そのように書いて見せるのは手であるとしても）、人はその手を慰めないで、痛がっている人を慰める、ということ。ひとはその人の眼を見るのである。（PI-I, 286）

これらも、3.1で指摘した「ぼろ切れ」であるが、今やわれわれはその価値が多少なりともわかる地点にいるのではなかろうか。また、「生きているものに対する我々の態度は、死んでいるものに対する態度と違う」（PI-I, 284）は、3.2で見た「反応」の主題に属すると考えられる。ここには、「カプトムシ」を捕まえようとする事とは、まったく異なった方向での探究が存在するのである。

注

- 1) 本稿は、公募ワークショップ「数学から心へ——ウィトゲンシュタイン哲学再考」、（オーガナイザー：岡本賢吾、科学基礎論学会2015年度研究例会、東京大学駒場キャンパス、2015年、11月）における提題「数学と心に関するウィトゲンシュタインの思考の連続性」、「Hidden Aspects of the Private Language Argument: What Will Wittgenstein's Philosophy Bring Us Henceforth?」 in *Proceedings of the 7th Indonesia Japan Joint Scientific Symposium* Vol.7, 305-310, Indonesia Japan Joint Scientific Symposium 2016 Committee, 2016 と一部重なる。本稿では、主として「私的言語論」と「規則遵守論」との連関の追究を進めた。なお、「規則遵守論」の記述については、私の学位論文「概念形成の哲学のために——ウィトゲンシュタインの数学の哲学」（千葉大学大学院社会文化科学研究科、2014年）の第3章第3節を援用している。
- 2) Wittgenstein, L, P. M. S. Hacker, J. Schulte (ed.) 2009. *Philosophical Investigations* (4th ed). Wiley-Blackwell. (『哲学探究』(ウィトゲンシュタイン全集8)、藤本隆志訳、大修館書店、1976年) (本稿での参照は第4版に基づく。邦訳は第2版を底本としている。) …【PI、『探究』と略記】
- 3) Maury, A. 1994. "Sources of the Remarks in Wittgenstein's *Philosophical Investigations*". *Synthese* 98, 349-378.
- 4) Wittgenstein, L. 2000. *Wittgenstein's Nachlass: The Bergen Electric Edition*. Oxford University Press. 遺稿への参照は、フォン・ライトの番号付けに拠る。
- 5) Wittgenstein, L. 1984. *Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik* (3rd ed): *Band 6*. Suhrkamp. (第3版の初版は同社から1974年に出版) (『数学の基礎』(ウィトゲンシュタイン全集7)、中村秀吉・藤田晋吾訳、大修館書店、1976年) (本稿での参照は第3版に基づく。邦訳は第1版を底本としている。) …【BGM、『基礎』と略記】
- 6) 鬼界彰夫著『ウィトゲンシュタインはこう考えた』(講談社現代新書、2003年)、299項に一部引用されている。
- 7) 規則遵守論を理論構築的に「読む」ことに対する批判については、Diamond, C. 1991. *The Realistic Spirit*. MIT Press. Chap. 1 に啓発的な論考がある。
- 8) Wittgenstein, L. 1993. *Philosophical Occasions*. 1912-1951. J. Klagge and A. Nordmann (ed), Indianapolis: Hackett. p. 394.